

広郷土史研究会

会報

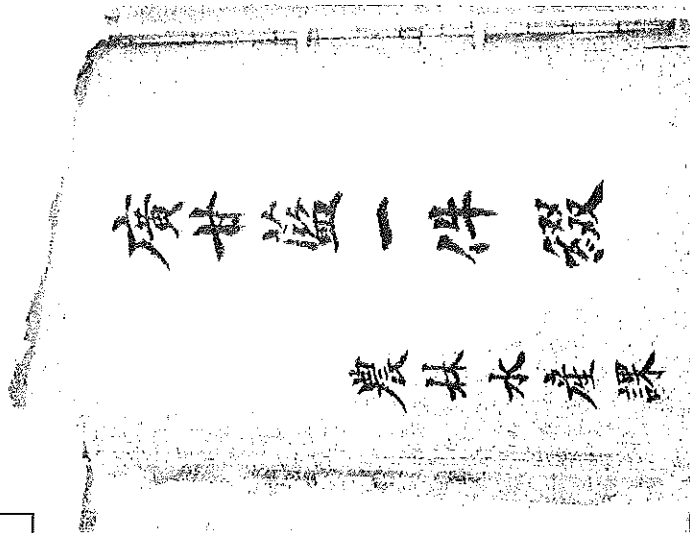
第119号

事務局 広まちづくりセンター内
〒737-0706 広古新開2丁目1-4
電話(0823)71-0706 FAX 73-5034
発行 平成26年5月15日
広郷土史研究会編集委員会

保存資料紹介「広甘藍（かんらん）一件綴」農林水産課（呉市）

書類のファイル
歴史関係 全3種
農業雑誌のコピー
品評会
会議
生産計画
生産高
栽培記録
トマト品評会

呉農業振興センター
〒737-0163
呉市郷原野呂の里2-1-3
TEL0823-77-0374



A

本誌P8右7行目全文記載
栽培を始めたのは

B

日露戦争当時（明治37年）に
は相当栽培

200

この「広甘藍一件綴」は戦後昭和25年ころから食料事情が良くなり主食のお米以外の嗜好作物の一つとして戦前盛んに栽培されていた甘藍（きゃべつ）の栽培を復興しようとする試みから園芸出荷組合を再組織して取り組んだ記録（約300頁）である。

記録は昭和26年～同31年までの同組合活動の記録で、この中には甘藍の沿革なども挿入されている。これによると「広甘藍は明治中期ころから広村で栽培され個人で広島市天満町市場や呉市場に盛んに出荷されていた。」と記され「県内の主要産地は広島市と賀茂郡（広村を含む）であったとされる。その当時は広島甘藍と呼ばれていたが、昭和初期に広甘藍と改名された。」とある。

広郷土史研究会では、この資料の裏付け調査を行い、その結果を発表する予定であるが今回は玉木家に伝わる資料によって明治後期（同37年～38年）以後の甘藍の歴史が紹介される。

D

（写真・文責 上河内 良平）
広甘藍には、それ以前の歴史は、ない

広と入れてない

目次

郷土が誇る人物評伝 玉木伊之吉 広甘藍生みの親	小栗康治・・・2頁
2014年度芸備地方史研究会大会 開催要項 同大会担当者	笠井今日子・・・28頁
藤田家文書解説 第FJ章 入船山記念館所蔵文書（その3）	古文書部会・・・30頁
例会報告・事務局報告	吉田顕治・・・31頁

AとBは、別の書類に書かれている物です。
どちらにも最盛期大正と記載

Cは「」が別で何処に記載されているか不明、
広甘藍のことであるかどうか不明

DはAと同じ書類に書かれています。



郷土が誇る人物評伝

玉木伊之吉

—広甘藍生みの親—

(80歳ころの伊之吉氏)

小栗 康治

本会での広甘藍研究史の整理

広甘藍について本会で最初に報告したのは大新開の故矢口一美氏で(本会報9号・平成11年1月)、明治10年ころ第1回移民船で阿賀の三好さんと近郷の5~6人が北米に渡った。その中の1人が1年後にキャベツの種を広の知人に送ってきて、その人が中心になって栽培したのが広でのキャベツ栽培のはじまり、と述べた。

その後会報69号(平成17年6月号)で編集者が「例会報告」のなかで「前回記述されていないので、ここで述べておく」と前置きして、明治新政府の地租改正で広村の税額が10倍になった。そこへ明治17年8月25日、未曾有の台風に襲われ諸新開の堤防が決壊して数百町歩にも及ぶ耕地が3尺(約1m)海水に没した。これ以後明治末期に模範村として表彰されるまで、広村民は塗炭の苦しみを味わうことになる。

(中略)これを救うべく登場したのが、塩に強い農作物、甘藍(キャベツ)であった。このキャベツを栽培することによって次第

に農業経営は軌道に乗り、やがてスイカ、ウリが栽培され、塩抜きが終わった所から米作が行われるようになったと付記した。

矢口氏の説

当の矢口氏は会報84号(平成20年3月)「広甘藍栽培のルーツ」で、「前回記した叔父の北米渡航時期に記憶違いがある。叔父がサンフランシスコへ渡航したのは明治20年ころで、その後何年かしてその叔父が私の祖父のところへキャベツの種を送ってきて栽培をはじめたというのが正しい」と訂正した。

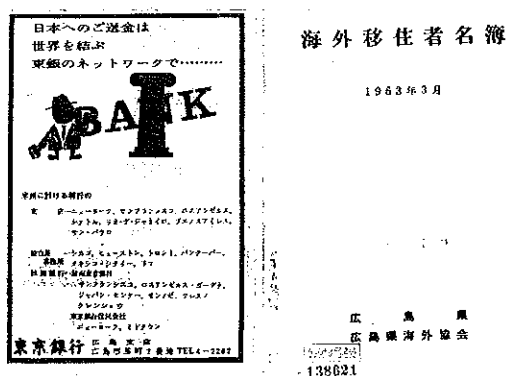
移民の時期についても、明治20年に賀茂郡から5人が出稼ぎに行ったが確かなことはわからない、しかし叔父一家は今もサンフランシスコ在住なので行ったことは間違いないと記した。

また同文「まとめ」で、19年以後呉鎮守府開庁工事がはじまって呉の人口が急増しはじめたので野菜の需要が高まり急速に栽培が広まり増産されるようになった。明治27~28年の日清、37~38年の

日露戦争時に軍の要請に応え広甘藍を大量に納入し農家の収入が増え、軍に多額の寄付をしたことが明治43年の模範村広村の誕生に寄与した一因、と述べた。

広から北米移民（出稼）時期

資料にもとづかない話しはともかく、移民として明治20年に賀茂郡から5人ほど出稼ぎに行ったとしているが、『広島県海外移住者名簿』『明治19年・20年賀茂郡内移民名簿』の項（下はその資料）



に、賀茂郡からハワイへ移民（出稼）として渡航したのは、

明治19年	広村	住吉勘七	(26才)
同20年	西条村	岡田初太郎	(30)
	西条村	水野源太郎	(17)
	竹仁村	島本シナヨ	(20)
	戸野村	門藤一夫	(18)
	戸野村	門藤 登	(16)

で、矢口氏の叔父亥之吉は、

渡航時年齢	22
家族人数	1
渡航先	アメリカ
同地区名	カリフォルニア
渡航年次	明治30年
渡航時居住地	呉市広町
備考	死亡

（『広島県海外移住者名簿』広島県海外協会・昭和38年2月発行。251.254.262.252頁）

との記載があるので、これまでのところこの資料が一番信頼できる資料となる。

矢口氏は会報84号で自家系図を公表し、北米に出稼ぎに行った叔父亥之吉は明治8年2月生まれで、明治20年12才のときサンフランシスコに渡ったと記した。この事実は確認できないが、前記『移住者名簿』に記載がある明治30年渡航となれば年齢は22才なので記載内容と合致する。

この件については、叔父家族がサンフランシスコ在住なので、その家族の話とつきあわせてみるとさらに正確な結論が出る。

記事訂正の要請

つぎは会報87号（平成20年9月）で、玉木伊之吉の孫にあたる浜本美智子氏が「広村甘藍栽培の普及と広園芸出荷組合」副題『祖父玉木伊之吉の思い出』と題して述べた。

しかしこの記述中、前半の「広甘藍栽培の興り」と「記」の項は自分の意に反した書かれ方をしているのでこの2項は抹消扱いとしてもらいたい。それと84・85・86号表紙の写真は資料として提供したが、その説明は私の意見ではないことを知ってほしい、と私は本人から聞いているのでその内容は参考としてここではとりあげない。

広甘藍栽培と災害・模範村との関係

つぎに会報90号（平成21年3月）で筆者小栗が『広甘藍ものがたり』と題して矢口氏の話しをなぞり、これまでの報告がなんの資料も示さないままなされているので「参考文献」としてはじめて広甘藍について記されている各種農業誌を紹介した。

その次は会報94号（平成21年7月）に「広

甘藍（カンラン）事始考」と題して上河内良平氏が報告した。氏も矢口氏の話しを継承し、明治20年早期に甘藍が広村に根付いたといえる、とした。

本会会報上での広甘藍栽培に関する問題の整理は以上のようなものです。

これまで本会報の記述の中で、明治17年広村を襲った未曾有の暴風雨高潮被害をうけた際、北米産のキャベツを栽培することによって村が困窮から救われたとか、模範村に貢献したのがキャベツということであれば、その旨役場文書や各種模範村視察記、県幹部の報告書、『大呉市民史明治編』各種農業誌等になんらかの記載があるはずなので、それらを調査して事実を確認しようとしたのが今回の報告文です。

それはともかく、9・69・84・87・90・94号と6回にわたって広甘藍が語られるのはそれほど広にとってインパクトがあるからだと思います。

今回また私が同じことを繰り返すのだが、その主題はキャベツの伝来と品種改良、栽培記録の推移、会報以外の諸誌による考察、広甘藍生みの親玉木伊之吉の紹介、ということになります。これからも広甘藍についてさまざまな建設的な議論ができることを期待しています。

広での甘藍栽培記録

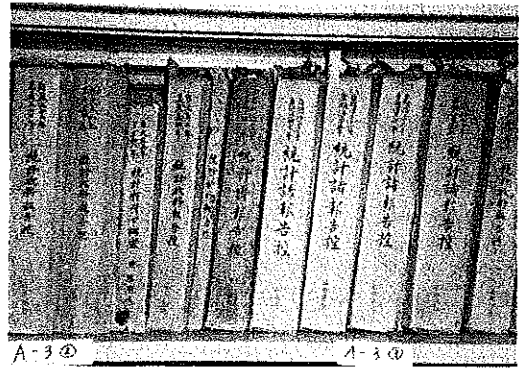
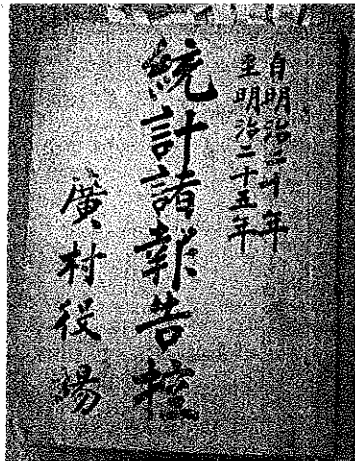
明治43年2月内務省から全国一の自治模範村として表彰を受けた広村は4月12日午後1時より公会堂で模範村選奨披露会を催し、よろこびにあふれていました。

その広村で歴史上はじめて広村栽培農産物のひとつとして甘藍栽培が記録されたのは、その模範村として表彰を受けた、明治43年度『統計諸報告控』報告期2月15

日（以下『控』とする。下写真はその一部）蔬菜収穫高の項に「甘藍・作付面積1反（約300坪）、収穫高500貫、価格40円」と記されたのが最初で、それ以前にはどこにも記載がない。このことは甘藍栽培が模範村広村誕生に貢献したとか、明治17年の台風被害の救世主となったなどという説はこの『控』からは立証できないようです。（下は記載部分）

なお、この「甘藍」には「キャベージ」とふりがながつけられているが、明治44年7月発行の『芸備農報』には「たまな」と表記されている。

『控』は大正6年になるとキャベジ、同8年からキャベツとなって、現在調査済みの昭和15年までつづいています。しかし大正5年発行の『賀茂郡誌』「蔬」の項（132頁）に「カンラン」とふりがなが付けられているので、たまな、キャベツ、かんらん、の呼び名が混在していたようすがうかがわれます。



(明治20年～昭和15年までの統計表)

それはそれとして『控』のうち「自明治20年～至明治25年」(上写真)以後、42年まで村内で栽培されていた蔬菜として、

- 大豆 (だいず)
- 小豆 (あずき)
- 蚕豆 (そらまめ)
- 碗豆 (えんどう)
- 菜種 (なたね)
- 粟 (あわ)
- 稗 (ひえ)
- 黍 (きび)
- 蕎麦 (そば)
- 蜀黍 (もろこし)
- 藍葉 (あいば) 藍染めの原料
- 甘蔗 (かんしょ) さとうきび
- 蒟蒻玉 (こんにゃくだま)
- 楮皮 (こうぞ) 和紙の原料
- 煙草 (たばこ)
- 蘿蔔 (すずしろ) 大根
- 玉蜀黍 (とうもろこし)
- 甘藷 (かんしょ) さつまいも
- 瓜哇薯 (じゃわいも) じゃがいも
- 大麻 (たいま) マリファナ
- 苧麻 (ちよま)
- 藺草 (いぐさ)

の22種が記されています。(途中馬鈴薯など多少品目の増減はある)

(上写真・明治42年度食用農産物表)

『広村視察記集』の記述に甘藍なし
 ついでだから明治43年11月発行の
 『広村視察記集』の「明治41年広村全戸
 収入経費一覧表」を引用しておきます。

農産物

種目	数量	価格(円)
米	9,408	131,712
裸麦	6,848	54,784
大麦	69	414
小麦	511	2,799
大豆	21	189
粟	55	385
黍(きび)	116	1,044
蕎麦	9	59

甘藷	418,500	16,742
馬鈴藷	33,000	2,475
小豆	96	1,152
碗豆	121	1,029
蠶豆	395	3,358
牛蒡	2,600	572
茄子	11,000	1,140
瓜	44,800	3,136
青芋	104,920	12,590
蘿蔔	159,600	3,990
胡蘿蔔	3,000	495
蕪菁	5,000	400
南瓜	11,200	784
胡瓜	10,000	500
葱	2,600	156
西瓜	2,700	486

以上、蔬菜20品目の中にはまだ甘藍は含まれておらず、特記するほど栽培がなされていなかったことを示しています。

甘藍と広との最初の出会い

甘藍と広村及び玉木伊之吉氏の出会いは、明治37、8年の日露戦争時のことで、呉の市場に「たまな」（球菜）の移入がしだいに多くなったのに関心をもち、自分たちにも栽培できないものかと試作をはじめたのが最初です。

このころ、呉市場に出回っていたことを大正元年（明治45）発行『芸備の園芸』広島県農会発行（『広島県農業発達史・資料編』665頁）表によって考察すると。

当時の広島県内の甘藍の生産地及び生産高は下表のとおりでした。

	反別	収穫高
広島	0,5町	2,500貫
佐伯	0,1	246
安佐	1,9	14,588

賀茂		800
御調	0,3	1,080
世羅	0,1	500
沼隈	0,1	700
芦品		320
比婆	0,8	3,200
合計		23,934

これをみると安佐郡の収穫量が群を抜き（同郡緑井村は生産地のひとつ）、つづいて比婆郡、広島となっているので、明治37、8年当時呉の市場に出回っていた球菜はこれらの郡市からのものと考えられます。

模範村広村を紹介するために編集された『広村』という本には（六 蔬菜）の項で、本村新開地の地味は最も蔬菜に適し、加ふるに呉市の発展は之か需要を促せるを以て1、2の篤農者は京都の栽培法を講習し其法を伝え、其後村に於ても各種の良種を求めて村民に分配し、之か改良を促し来りしが、明治39年有志相図り、種苗促成園を組織していよいよ之か改良発展に従事せり。爾来其産額頗る増加し…呉市に輸出…（以下略）

と記し、蔬菜生産に力をいれている様子がうかがわれます。

因みに、先の明治43年度の『控』に、作付1反（約300坪）、収穫高500貫（1,875キロ）、価格40円と記されている数字から、参考のために甘藍の栽培個数を計算してみると。

甘藍の重さは1個500匁～1貫目なので（1貫から1.5貫という意見もある）中間をとって1個700匁として計算すると、

$$500 \text{ 貫} \div 0.7 \text{ 貫} = 714 \text{ 個}$$

になる。後には反当り収穫量は1,000貫から1,500貫程度になるので、当時の収

穫規模はその半部から3分の1程度ということになります。

しかし37,8年から栽培にとりかかって村役場に蔬菜として記録される43年までに4~5年という歳月がかかっています。この年月がどういう意味をもつのかをつぎに考えてみましょう。

甘藍は明治43年に
作付面積 1反
収穫高 500貫
価格 40円

のものが3年後の大正2年には下記のように4倍になっています。

作付面積 4反
収穫高 2,000貫
価格 160円

それでも安佐郡と比較すると問題になりません。しかし同4年には

作付面積 15反
収穫高 12,000貫
価格 840円

と、飛躍的に増産され、産地化がすすんでいることが理解できます。

つまり明治37,8年に広で甘藍を栽培することになったものの、おもうように育たず地元の土壤にあった品種に育て上げるのに苦勞したことが、1反に広げるのに5年という歳月を費やしたことに表れているのです。(下は共同栽培地写真)



たまな (玉菜)

前記のように市場関係者や栽培関係者の間では甘藍の正式名がキャベージ・キャベツであっても、形状は「丸い野菜」なので「たまな」と称していました。それは『大呉市民史大正編』610ページ「広特産・夏甘藍、駐在藤井技手」の話しとして、

「起源は(明治)37,8年戦役当時より呉市場に球菜移入多きを加えるをみて同村試作。当初移入された種子、サクセッション、米国、北海道、中野種等は何れも結球せず、地質に適する独特の栽培法を案出し中野種を改良せるが今日のもので自然特有の品種となり、殆ど原型を変じて扁平中形となり、1個500匁より1貫200匁に及び長期貯蔵にも堪える非常に結球し易いが一大特徴。販路は大阪、神戸、四国、九州、朝鮮、満州へも、益々発展の機運にあり」

と述べ「たまな」(球菜)と認識し、栽培する側も見た目そのままに「たまな」と言っていました。また、この記事は甘藍と広との出会い、品種改良の苦勞などの様子も活写し、在来キャベツの原型を変じて扁平中形、広特産の形になった旨記している。

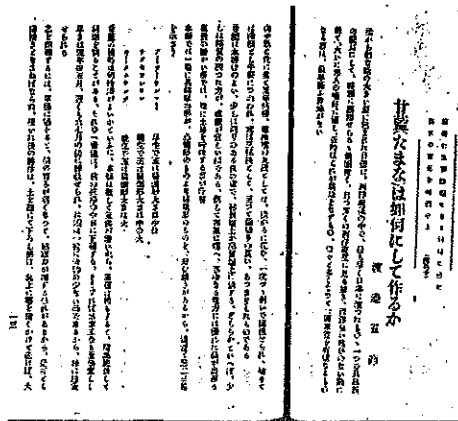


(上写真は広かんらん)

書誌にみる広甘藍の記述

つぎに前記『大呉市民史大正編』以外の書誌によって広甘藍の来歴を調べると、農

業誌を中心に記されているのでそれ等を紹介してみます。(下は明治44年の『芸備農報』)

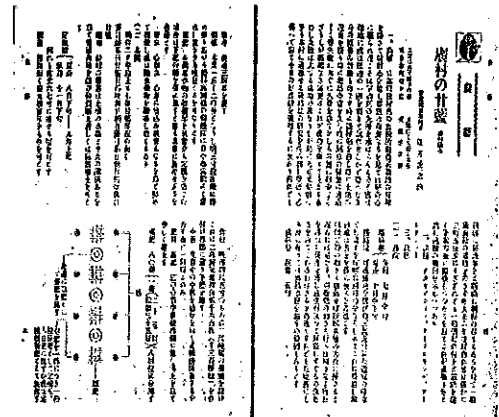


上資料にみられるように、明治44年発行『芸備農報』(明治44年7月発行)で渡辺五節が「甘藍(たまな)は如何にして作るか」と題して栽培方法を示して、県内に栽培を奨励している様子がうかがわれ、広村だけが特別でなかったことを示唆しています。

つぎに大正7年6月発行の『芸備農報』は「広村の甘藍」として広村駐在の賀茂郡農業技手・辻井愛之助が以下のように記しています。

「沿革・日露戦後村内の比較的篤農家、栽培の有利を聞いて射利心を起し、形態の奇異なるを見ては好奇心に駆られ吾こそは宇治川の先陣を承はらんものと、或いは田地の一隅を割きて試作せしかど、覚へなき身の腹帯の知略も出せず、時に播種を逸し、時に土地の選定を誤り、時に肥培の当を失し、時に蚜虫(あぶらむし)の猛襲に遭遇する等失敗に次ぐに失策を以てせしもの実に尠(せう)少(せう)ならざりしが、絶間なき需要はこれが成功を祈りて止まず、重ねし失敗は大なる成功の基なりしが終に大正元年頃に至り本村に適応せる栽培法の研究を生み出し、甲語り乙伝えて以て今日の好成績を獲得するに至れり、然れども栽培に秘訣多きと、販路に制限の存するを以て一般広面積の栽

培を許さず、昨大正6年度広村作付は僅かに三町五反にすぎざれども、一般嗜好の向上と販路を遠く下関方面に拡張しつつあるを以てこれが産額も年と共に増加の傾向を示しつつあり(以下、品種・栽培法は略す)」と、栽培は日露戦争後であることを記す。



さらに昭和30年の記録には、

① 呉市特産広甘藍について
一、沿革

広甘藍の栽培の起源は明治中期頃にして、当初はその品質悪く市場価値が極めて低かったが、其の後生産農家多年の努力により品種の改良が行われ生産が増強し、大正の初期には漸く市場に於いて高評を得たので生産農家は激増し、最盛期の大正末期に於いてその栽培面積200有余町歩に達し生産量200万貫を越え、東京、大阪、九州は勿論、遠く大連にまで出荷した。

然るに昭和12年よりの戦争のため旧海軍により耕地が潰され、又一方主食増産の施策のため、その生産は全く振るわなくなり、昭和21年に至りては栽培面積は僅かに3町歩に止まり、往時全国に有名を馳せた広甘藍も全く火が消えた状態となった。其の後昭和24、5年頃から、食糧事情の好転に伴ひ生産出荷組合を中心に品種改良を行う一方、増産に不断の努力を傾けた結果、昭和27年に至り、初期の目的30万

貫の生産を達成し、戦後初めて京阪神に多量出荷し、その品質が高く評価され生産者の増産意欲がいよいよ昂揚したので、その後毎年10町歩の増反が行われ昭和29年に至り50町歩まで拡大された。

二、品種特性

広甘藍はサクセッション及ヴァンダーゴを大正の初期広町玉木伊之吉氏を中心に品種改良したもので、葉は濃緑で光沢が強くやや縮緬を有し葉型は倒長卵形で葉脈は外に反転し球は円形乃至腰高扁球で熟期は夏播中生系のものとしては早生の部類に属し、

型は中型で「しまり」は非常によし、夏播中生としては非常に優秀な品種で収穫期は12月～3月で反当1,000貫乃至1,500貫位増産型である。

三、生産状況

昭和29年度に於ける呉市の生産状況は下記表の通りであるが、市場性の最大欠点である量的不足を打開するため昭和30年度より増産5ヶ年計画により呉市内100町歩、隣接町村100町歩を目標に増産を図る。

区分	旧市	宮原	吉浦	警固屋	阿賀	広	仁方	計
作付面積	10反	1	2	5	15	350	100	483
反別	800貫	800	800	800	1000	1100	1000	
生産見込量	8000	800	1600	4000	15000	385000	10000	514400
自家消費	3000	300	600	1000	5000	70000	20000	99000
出荷可能量	5000	500	1000	3000	10000	315000	80000	414500

四、栽培法 (以下略)

一、沿革
 呉市の特産品として、昭和56年(昭和37年)に「郷土の誇る特産野菜を訪ねて9『広甘藍』」を要約すると、広甘藍が発達した理由は、野菜の端境期を狙った点にあると思う。その起源は比較的新しく明治37年、38年の日露戦役当時より発足したことは、日の浅い輸入野菜としては無理からぬところである。当時呉市場に甘藍の移入が次第に多くなり、それに刺激されて玉木伊之吉氏(当時39才前後・筆者註)らはこの新種野菜に目をつ

中期としているのは冒頭『控』では確認できない。それを証明する新たな資料が出てくれば、わずかではあるが話しかわってくる可能性もあるが、基本はかわらないと思っている。

つぎに『営農』昭和56年11月号(広島県農業協同組合中央会刊)に記された「郷土の誇る特産野菜を訪ねて9『広甘藍』」を要約すると、広甘藍が発達した理由は、野菜の端境期を狙った点にあると思う。その起源は比較的新しく明治37年、38年の日露戦役当時より発足したことは、日の浅い輸入野菜としては無理からぬところである。

(『呉市経済部産業部農林水産課』資料)

と、主として昭和12年～30年までについて述べています。

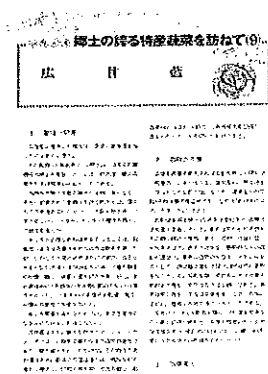
この記述中、栽培がはじまったのが明治

当時呉市場に甘藍の移入が次第に多くなり、それに刺激されて玉木伊之吉氏(当時39才前後・筆者註)らはこの新種野菜に目をつ

け、大阪の種苗商よりサクセッションとブ
ァンターゴの種子を購入して試作を志し
た。ところが幼稚な栽培技術をもってし
ては、到底思うような成績のあがらぬ内に数
年を送った。

(尚ここには採録していないが甘藍を「明治4
3年皇后陛下行啓」などの記事は後に玉木伊
之吉氏が受けた感謝状にみられるように年代
が誤っているので省いている)

広甘藍の特徴は7月上旬～8月上旬播き
で、12月～3月に出荷される。サクセッ
ションでは寒害をうけやすく、また結球歩
合の不良であったことから、改良の着眼点
がまず耐寒性で増収性の、しかも貯蔵に耐
え輸送の容易なものに重点をおかれたわけ
である。



葉は濃緑で光沢が強く、ややちりめん状で、
葉形は倒長卵形、球は円形～腰高偏平で、
熟期は中早生、1球の重量は500匁～1
貫程度である。

甘藍は暑さには強いかわりに、雨には最も
弱く降雨が続いた後は必ず腐敗するものが
多い。

市場に最も好まれる球の大きさは500～
600匁といったところである。

反当たり収量は1000～1500貫程
度。

輪作及び跡作—主として水田を利用するの
で、稲、蔬菜を組合せて2～3年の輪作を行

う。跡作としては、大部分が馬鈴薯で、そ
の跡に稲を植え付けるのが普通である。

販路および出荷状況—最盛期における販路
は大阪、神戸が大部分を占め、四国、下関、
別府、朝鮮、満州の諸地域にもわたった。

当時の生産高は50万貫におよび、少ない
時でも40万貫を下ることはなく、荷造り
はすべて空俵につめ、1俵を8貫の梱包と
し、ほとんど貨車で出荷したが、15t車で
220～230俵を積載し、180～200車両を発
送したものである。

出荷の最盛期は1月から2月にかけてが一
番多く、年によっては3月頃が最も高値に
さばけたこともあった。

現況—戦時中は不急作物として、その生産
も制限され、現在においては自家用として
栽培するていどで往年の面影はないが、今
後再び旺盛な時代にかえさんとする機運は
濃厚である(後略)と紹介しています。

以上の諸資料が示すのが広甘藍の歴史で
す。

広甘藍栽培推移

つぎに『控』から甘藍の栽培面積を年度
別に抽出してみると、

年度	反
明治43年	1
大正 2年	4
3年	6
4年	15
大正 7年	31
8年	30
9年	34
10年	32.5
11年	33
12年	35
13年	40
昭和 3年	307
4年	325
5年	164
6年	187

7年 276
 8年 298
 9年 395
 10年 393
 11年 396
 12年 402
 13年 426

となっています。生産額は後ページ『呉市史第6巻』資料を転載していますのでそちらをご覧ください、同じ資料で作成されています。

玉木伊之吉氏の生い立ちと功績

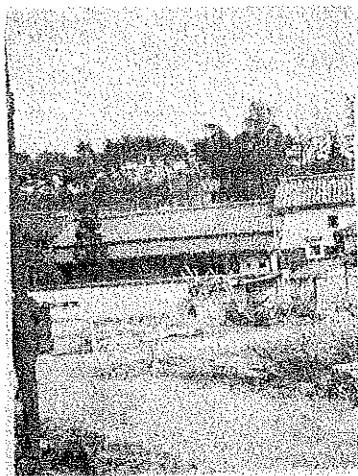
それではつぎに玉木家が所蔵する表彰状や感状等を紹介しながら伊之吉氏の足跡をたどってみましょう。

玉木伊之吉氏は慶応2年(1866)9月3日、父玉木源太郎、妻コマとの間に長男として生まれ、昭和32年に92才で亡くなっています。

子どものころは寺子屋に通っていましたが、仲間と相撲をとってチョンマゲを抜かしては親にしかられていました。

青年になっても辞書を片手に独学で勉強をつづけていました。

(下写真は生家)



(上写真は26才ころ使用していた辞書)

伊之吉氏は明治25年3月、26才で19才のチノさんと結婚。27年12月に次女誕生。(長女は早世)

家督相続と表彰状

それからは32年4月に3女、35年1月に4女、37年3月に5女誕生。

翌明治38年3月7日父源太郎隠居により39才で家督を相続。

伊之吉氏が呉市場で甘藍と出会い、試作に取りかかったのはこの頃のことです。

それはさておき、この年4月には県庁で藤田村長と助役が内務大臣から、広村が模範村としてふさわしいとの賞詞をうけ、いよいよ広村は模範村の誉れが高くなり、国の政策実現のための先駆村としての役割を担い、37~38年の日露戦争に対しても、村が軍資金の拠出を募集すると伊之吉氏は

積極的に協力し、以下の徽章を受けます。

【史料1】

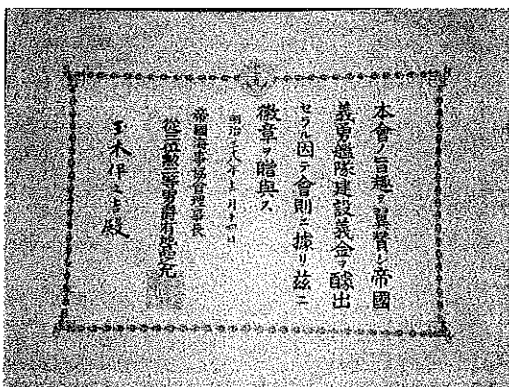
本会ノ趣旨ヲ翼賛シ帝国義勇艦隊建設義金ヲ醸出セラル因テ会則ニ拠リ茲ニ徽章ヲ贈与ス

明治三十八年十二月十四日

帝国海事協会理事長

従三位勲二等男爵有地品之允印

玉木伊之吉殿



広村での義勇艦隊寄付金は1,953円にもなっていました。

翌39年10月、伊之吉氏に男子（高市）誕生。5人の子持ちとなった伊之吉氏は、模範村の村民としての責任を果たし、2年後の40年にも前記徽章につづいて下記表彰を受けました。

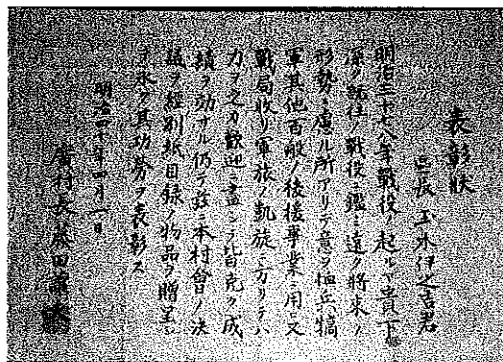
【史料2】 表彰状

区长 玉木伊之吉君

明治三十七八年戦役ノ起ルヤ貴下深く既往ノ戦役ニ鑑ミ遠ク将来ノ形勢ニ慮ル所アリテ恤兵犒軍其他百般ノ後援事業ニ用ヒ又戦局取り軍旅ノ凱旋ニ方リテハ力ヲ之カ歓迎ニ盡シテ皆克ク成績ヲ効サル仍テ茲ニ本村会ノ決議ヲ経別紙目録ノ物品ヲ贈呈シテ永ク其功劳ヲ表彰ス

明治四十年四月一日

広村長 藤田譲夫 印



この陸海軍恤兵金は広村で計483円が集まっています。

当時藤田村長58才、伊之吉氏は41才で区長になっていました。

共同苗代の先進性

伊之吉氏の田畑は吉松・杭本・末広・大新開にありましたが、研究熱心でいつも農産物の品質改良・生産性向上に精を出しネギ、甘藍だけではなく、米の生産力向上めざして苗代改良にも熱心に取り組んでいました。このため翌年には苗代審査で一等の褒状を受けています。

【史料3】 褒状

出品人 玉木伊之吉

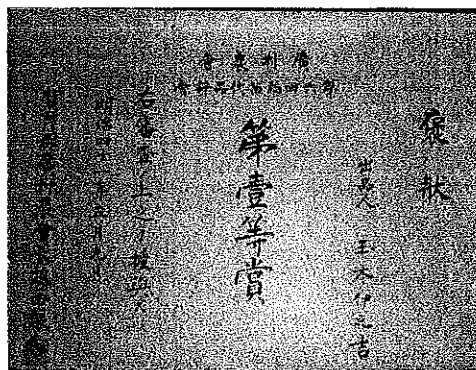
広村農会

第六四回苗代品評会 第一等賞

右審査ノ上之ヲ授与ス

明治四十一年五月九日

賀茂郡広村農会長 藤田譲夫 印



この力量はだれもが認めるところとな

り、翌年にも共同苗代による事業経営に尽力したとして賀茂郡長から表彰を受けています。

【史料4】 表 彰

賀茂郡 広村

吉松共同苗代組

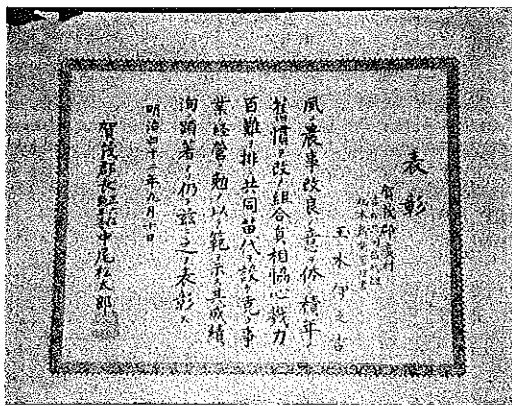
杭本新開管理者

玉木伊之吉

夙ニ農事改良ノ意ヲ体シ積年ノ旧慣ヲ改メ組合員相協心戮力百難ヲ排シ共同苗代ヲ設ケ克ク事業経営ニ勉メ以テ範ヲ示ス其成績洵ニ顕著ナリ仍テ茲ニ之ヲ表彰ス

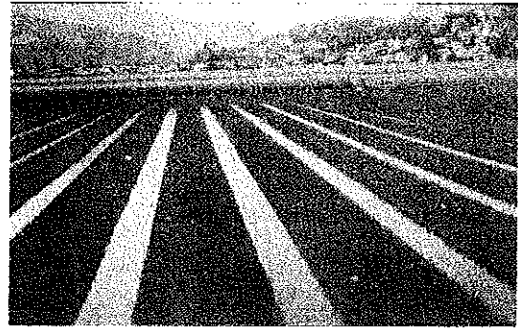
明治四十二年九月十日

賀茂郡長正六位勲五等中尾松太郎印



この状により伊之吉氏は吉松共同苗代組と杭本新開管理者の役職に就いていたことがわかります。

この共同苗代推進は明治40年に県知事が農業改良の一環として実施を促したのですが、県下各村農民の猛反発に遭い「共同苗代騒動」に発展して結局その方針を見送らざるを得なくなったといういわくつきのものですが、広村では出来ていたのです。これは当時最も先進例で、それを指導した玉木伊之吉氏たちの功績は特筆すべきものでした。県はこの広村の事例でもって県下に広げようとしたのですが、実現しなかったようです。



(明治後期の共同苗代)

甘藍の評価高まる

翌年明治43年2月には次男誕生。6人の子持ちとなり、いよいよ精力的に働いています。甘藍栽培も1反にまで広がり品種改良に成功してさらに増産の目途がたつようになっていました。このため伊之吉氏は自信をもって甘藍とネギを品評会に参考として出品したところ、農家に与える利益大なりとして広島市・安芸郡・安佐郡連合農産物品評会長の広島市長から謝状を受け、広の甘藍が注目を集めたのでした。

【史料5】 謝 状

一 甘藍及葱

右本会へ参考トシテ出品相成斯業ニ裨益ヲ与へタルコト不尠依テ茲ニ感謝ノ意ヲ表シ候

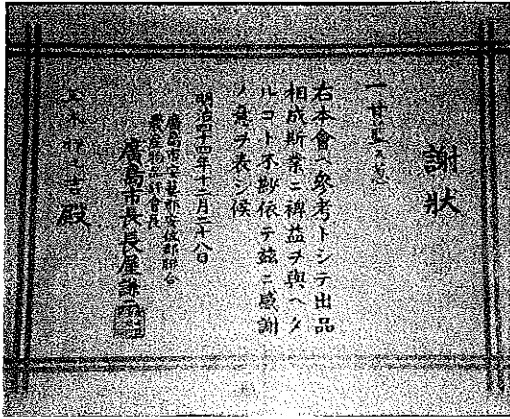
明治四十四年十二月二十八日

広島市安芸郡安佐郡聯合

農産物品評会長

広島市長長屋謙二 印

玉木伊之吉殿



こうして伊之吉氏は篤志家としてさらに知られるようになり、武徳会広島支部の拡張委員の役職も囑託されています。（写真は省く）

【史料6】 玉木伊之吉殿

大日本武徳会広島支部拡張委員を囑託ス
明治四十五年三月二十八日

大日本武徳会広島支部長宗像政^印

同年は大正元年となりましたが村内の甘藍栽培は努力の甲斐あって明治42年の4倍になっていました。

伊之吉氏11月3男誕生。気をよくし、ひきつづき蔬菜の品種改良に取り組み、ネギと甘藍を品評会に出品し一等賞になっています。

【史料7・8】 證

広島県賀茂郡広村

品名 葱 甘藍 玉木伊之吉

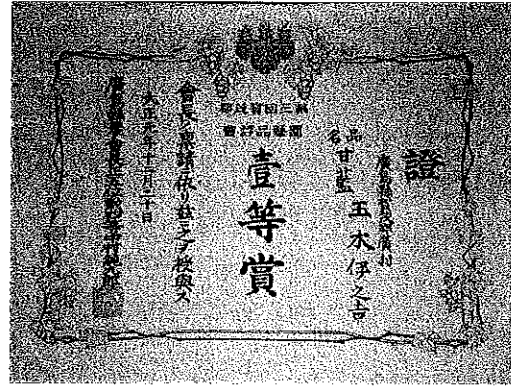
第三回賀茂郡

園芸品評会 一等賞

会長ノ稟請ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス

大正元年十二月二十日

広島県農会長正五位勲四等中村純九郎^印



実はこの證は葱と甘藍の2通あるのが便宜上1通のみ表示しました。

翌年9月次女結婚。

伊之吉氏は翌年も甘藍を品評会に出品して一等になります。

【史料9】 證

広島県賀茂郡広村

品名 甘藍 玉木伊之吉

第四回賀茂郡

園芸品評会 一等賞

会長ノ稟請ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス

大正二年十二月十四日

広島県農会長正四位勲二等寺田祐之^印

しかし、当時広村で葱の生産額は2,700余円でしたが、甘藍はまだ160円にしかありませんでした。

品評会は毎年開かれ、伊之吉氏は大正3年、4年に葱を出品して1等賞になっています【史料10・11】。同4年6女誕生。翌年5年【史料12・13】は甘藍と葱。6年は葱【史料14】、同7年【史料15】には甘藍で1等賞。葱は伊之吉氏の長男（12才）が1等【史料16】になっています（表彰状は前と同じなので省く）。（家庭では6年2月3男早世。11月3女結婚）。

大正7年は甘藍栽培急騰のピークで、栽培面積は3町1反、収穫高は18,600貫にまで広がって、農家は活気を帯びていました。

このころにはすでに伊之吉氏は村会議員となっており、つぎの表彰状があります。

【史料17】 表彰状

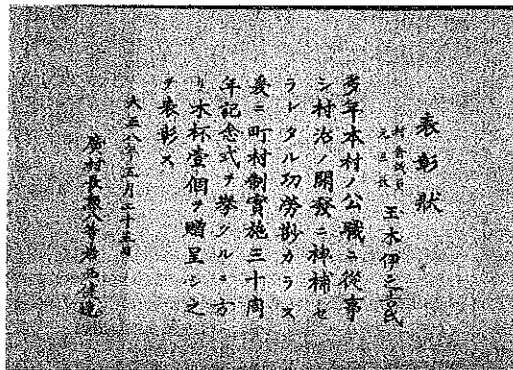
村会議員

元区長 玉木伊之吉氏

多年本村ノ公職ニ従事シ村治ノ開発ニ裨補セラレタル功勞尠カラス爰ニ町村制実施三十周年記念式ヲ挙クルニ方リ木杯壹個ヲ贈呈シ之ヲ表彰ス

大正八年五月二十五日

広村長勲八等岩西建造 印



『芸備農報』第287号（大正8年5月25日発行）によると、4月に広島県農会主催・農事資料展覧会が行われ、農事資料展覧会褒賞授与式・農事功勞者表彰式が挙行され、そこには、

「玉木伊之吉ノ農事上ノ事績・甘藍ノ栽培法」を理由に表彰されています。

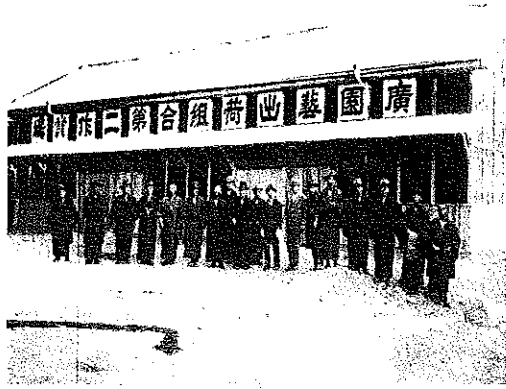
しかしそれでも甘藍は広村蔬菜統計10品目中のサツマイモ、サトイモ、ジャガイモ、ダイコン、ネギ、シロウリ、ナス、スイカ、キャベツ中の最下位でした。

広村主要蔬菜ノ生産額（単位・円）

下表は『呉市史第6巻』999頁による広村の年代別主要蔬菜生産額の推移です。

年号	サツマイモ	サトイモ	ジャガイモ	ダイコン	ネギ	シロウリ	レンコン	キャベツ	ナス	スイカ
明治41年	16,742	12,590	2,475	3,900	156	—	—	—	1,140	486
43	25,470	15,562	4,496	4,087	1,740	—	50	40	1,620	665
大正1年	53,077	16,099	5,568	5,670	2,784	1,587	30	160	1,620	810
3	35,580	14,477	5,400	7,560	4,480	6,120	900	840	3,456	1,350
5	31,702	12,324	8,045	12,212	6,592	4,139	375	1,750	2,484	1,760
7	72,768	41,498	44,400	10,542	12,180	11,008	6,860	3,720	4,164	5,997
9	68,928	59,760	35,928	8,085	16,524	11,070	6,352	4,080	4,320	5,160
11	32,132	59,280	29,295	8,106	16,524	5,710	9,360	3,630	4,641	2,280
13	36,564	49,700	24,678	7,840	16,218	6,300	10,125	5,500	7,200	4,000
昭和1年	43,524	42,075	24,347	7,232	20,925	6,534	8,040	18,446	8,705	7,210
3	44,335	20,952	32,385	16,000	26,664	11,366	13,608	32,235	5,304	5,460
5	20,065	29,403	20,365	10,105	13,851	2,830	2,790	8,462	4,782	3,461
7	28,196	23,824	17,481	4,784	12,742	4,669	5,010	17,581	7,712	14,470
9	33,011	49,251	21,046	5,709	7,665	7,953	7,357	31,161	12,545	20,327
11	28,011	50,839	26,747	9,778	10,446	4,990	6,961	43,560	9,082	15,059
13	32,122	45,041	28,313	16,085	25,869	7,518	8,597	75,070	7,252	11,273

大正9年には甘藍の生産高がこれまでの最高を記録しましたが、伊之吉氏は品評会に葱を出品【史料18】して1等になっています。

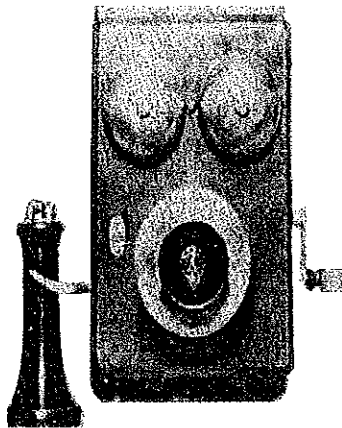


(広園芸出荷組合第二作業場)

出荷組合について

甘藍は明治43年に比べ翌年は4倍の栽培になったものの販売は商人によって行われていたため利益はこれら商人に吸い取られ、農家にはわずかな利益しか残りませんでした。このため伊之吉氏は栽培農家数百によびかけ、大正3年450名からなる広村園芸出荷組合を設立し、販売面や生産統制も行い、安定した生産基盤を確立したのでした。(『観光呉地誌』)

出荷組合といっても事務所はなく、伊之吉宅にあった電話で各地消費地と連絡をとっていたのです(下のような電話があった)



大正9年7月、伊之吉氏は国勢調査員に任命され【史料19】、家庭では4月に4女結婚。

甘藍栽培が高止まりして安定していた大正11年、伊之吉氏に以下の朗報が届きました。

皇后陛下行啓御用達仰せつけられる【史料20】

通知状

一 甘藍

右大正十一年三月

皇后陛下本県ニ行啓被為在候際

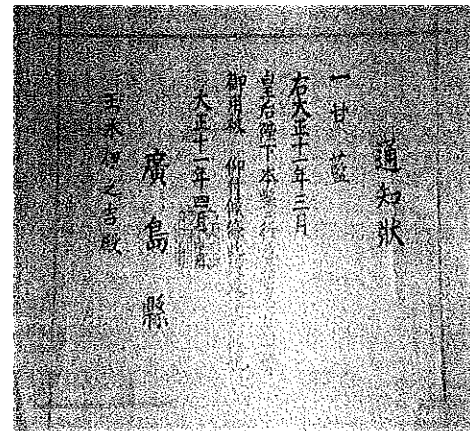
御用被 仰付候條此段及通知候也

大正十一年四月五日 印

広島県

玉木伊之吉殿

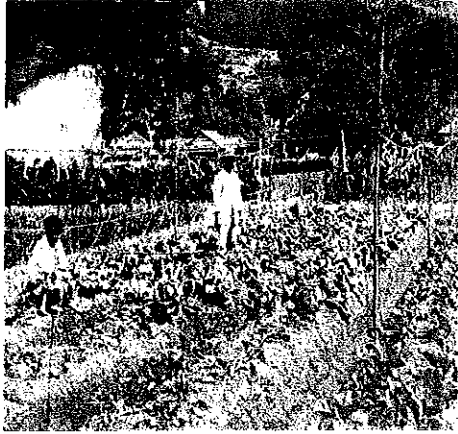
(下写真)



という通知がそれです。

通知を受けた伊之吉氏は畑に注連縄を張って甘藍栽培をはじめたのでした。

しかし皇后陛下の御用なので人糞その他の肥料を使うわけにはいかないので随分気を遣ったといいますが無事役目を果たします。



(皇后陛下御用達の甘藍畑)

この年は伊之吉氏の長男（16才）が甘藍と葱で品評会一等賞になっています。

【史料21・22】

證

広島県賀茂郡広村

品目 甘藍 葱 玉木高市

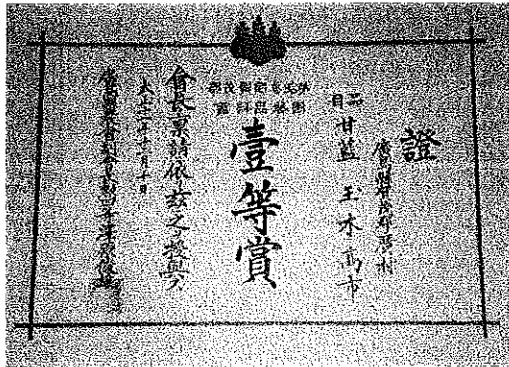
第十三回賀茂郡

園芸品評会 一等賞

会長ノ稟請ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス

大正十一年十二月十日

広島県農会副会長勲四等沢原俊雄印



この年を機に、7年から13年にかけて停滞していた甘藍の生産額が再び上昇をはじめ、13年には5,500円、15年には18,446円となり、広村統計10品目中9位、7位と順位を上げていきました。このため賀茂農会長から表彰状を受けました。

【史料23】

表彰状

広村

玉木伊之吉

凡ニ農事改良ニ志シ励精克ク範ヲ示シテ他ノ誘掖シ以テ専心し斯業ノ開発ニ努ム其ノ功勞尠シトセス仍テ茲ニ本会功勞者表彰規定ニ拠リ木杯壹組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

大正十二年三月三十一日

賀茂郡農会長 富樫東十郎印



さらに1年後には稲作多収成果に対して奨励金をうけています。

【史料24】

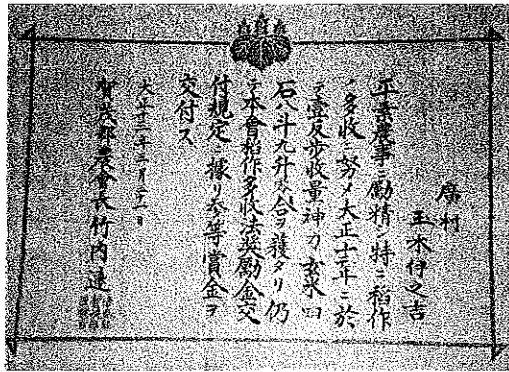
広村

玉木伊之吉

平素農事ニ励精シ特ニ稲作ノ多収ニ努メ大正十二年ニ於テ一反歩収量神力玄米四石八斗九升零合ヲ穫タリ仍テ本会稲作多収法奨励金交付規定ニ拠リ參等賞金ヲ交付ス

大正十三年三月三十一日

賀茂郡農会長 竹内 遠印



とあり、米の品種「神力」の収穫向上に取り組んでいたことが理解できます。

これは「従来は稲の種類は12、3にして雑駁を極めしもの、近時粳米の主なるものは雄町・神力の二種となり、ほとんど統一の目的を達成するに至れり」（『広村』東京警眼社発行 362 ページ）という状況の中で生産力を高めた功績が認められたので、蔬菜栽培のみの功績ではなかったのです。

伊之吉氏村会議員を辞める

しかし翌年4月には、以下にみられように村会議員をやめますが、永年にわたる功績に対して表彰を受けます。

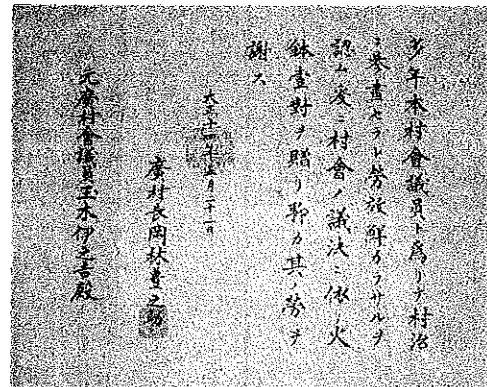
【史料25】

多年本村会議員ト為リテ村治ニ参画セラレ勞効鮮カラサルヲ認ム爰ニ村会ノ議決ニ依リ火鉢壺対ヲ贈リ聊カ其ノ勞ヲ謝ス

大正十四年五月二十三日 印

広村長 岡林豊之助 印

元広村会議員 玉木伊之吉殿



こうして59才で村会議員を辞職し農業に専念します。このため甘藍栽培はさらに発展を遂げ、同年12月には、大日本農会より農村施設経営・農事改良に対して顕著な実績をあげたとして名誉賞状を受けます。

【史料26】 名誉賞状

広島県

玉木伊之吉

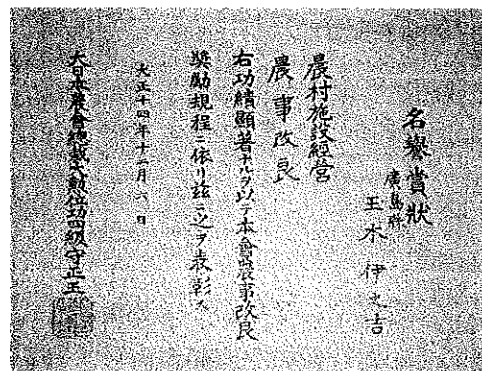
農村施設経営

農事改良

右功績顕著ナルヲ以テ本会農事改良奨励規定ニ依リ茲ニ之ヲ表彰ス

大正十四年十二月六日

大日本農会総裁大勲位功四級守正王 印



さらに2年後には帝国飛行協会の紅色会員になります。

【史料27】 会員証

玉木伊之吉殿

本協会会則第二條ニ依リ紅色会員ニ列ス

昭和三年二月七日

帝国飛行協会 印



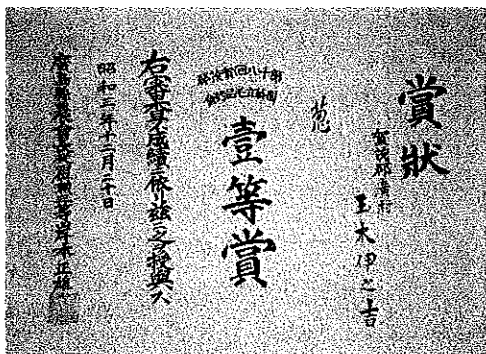
伊之吉氏の農産品の品質改良の努力はさらにつづき、ネギを諸所の品評会に出品し1等になります。

【史料28】 賞状

賀茂郡広村
 葱 玉木伊之吉君
 第十六回品評会 第一等賞
 審査ノ結果ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス
 昭和三年十一月二十四日
 広島県立西条農学校品評会長
 従五位勲六等山下昇 印

【史料29】 賞状

賀茂郡広村
 玉木伊之吉
 葱
 第十八回賀茂郡
 園芸立毛品評会 葱 一等賞
 右審査ノ成績ニ依リ茲ニ之ヲ授与ス
 昭和三年十二月二十日
 広島県農会長従四位勲三等岸本正雄 印

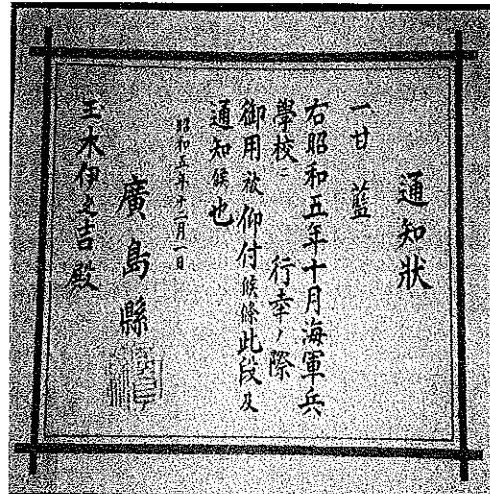


この大正13年から昭和3年にかけては甘藍の生産額が第2のピークを迎える時期で、広村内蔬菜統計10品目中9位から7位、そして3位へと順位を上げていきます。

一方、昭和4年7月に内閣より農業調査委員を命じられています【史料30】。

翌年、伊之吉氏にふたたび甘藍御用の朗報が入ります。それが以下の通知状です。

天皇陛下行幸御用達拝命
 【史料31】



通知状
 一、甘藍
 右昭和五年十月海軍兵
 学校ニ 行幸ノ際
 御用被仰付候條此段及
 通知候也
 昭和五年十二月一日

広島県 印

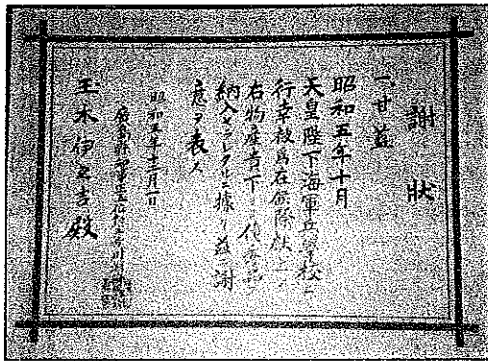
玉木伊之吉殿
 伊之吉氏はこの任務を無事果たし以下の謝状を受けています。

【史料32】 謝状

一 甘藍
 昭和五年十月
 天皇陛下海軍兵学校ニ

行幸被為在候際献上ノ
右物産貴下ヨリ優秀品ヲ
納入セラレタルニ抛リ茲ニ謝
意ヲ表ス

昭和五年十二月一日
広島県知事正五位勲三等川淵洽馬印

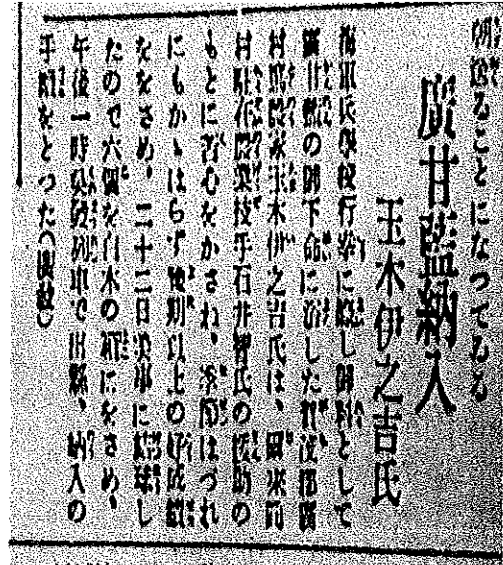


このため伊之吉氏の名声と広カンランの価値はさらに吊り上り、甘藍生産は急上昇をつづけていきます。

昭和5年10月22日『中国新聞夕刊』は天皇陛下が「明日・江田島行幸」と題して報道しています。(下写真)



この紙面には「広甘藍納入 玉木伊之吉氏」との記事(上写真○囲い)があり、つぎのように記しています。



広甘藍納入

玉木伊之吉氏

海軍兵学校行幸に際し御料として広甘藍の御下命に浴した賀茂郡広村篤農家玉木伊之吉氏は、爾来同村駐在農業技手石井智氏の援助のもとに苦心をかさね、季節はずれにもかかわらず予期以上の好成績をおさめ、22日美事に結球したので6個を白木の箱におさめ、午後1時呉発列車で出県、納入の手続きをとった。(広発)

というもので、広甘藍の名声がさらに上がったことはいうまでもありません。

甘藍生産額の上昇

このことがあって、昭和3年に広村内蔬菜生産額中の3位になって以来、作付面積と生産高は、

- 5年 16町4反 146,400貫
- 7年 27町6反 251,160貫
- 9年 35町9反 311,612貫

と伸びつづけます。このため今度は中央園芸組合から感謝状を贈られます。

【史料33】 感謝状

玉木伊之吉殿

君資性温厚ニシテ篤農ノ士ナリ早クヨリ農家經濟ノ助長ヲ図ルハ共同ノ力ニ依ラザルベカラザルヲ力説シ同土ヲ勧誘シテ大正八年園芸組合ヲ組織セラレ推サレテ組合長トナラレ爾來精神誠意身ヲ挺シテ只管ニ組合發展ノ為ニ努力セラレ組合員ノ裨益スル所誠ニ甚大ナリ其ノ功勞ニ報ル為組合總會ノ決議ニ依リ宣徳火鉢壹対ヲ贈リテ聊カ感謝ノ意ヲ表ス

昭和八年二月十一日 印

中央園芸組合 印



同7年3月跡取り息子の次男結婚。孫娘が誕生し伊之吉氏も一安心しました。

同9年には県知事から米生産統計調査員として尽力したことに対して感謝状をおくられました。

【史料34】 感謝状

玉木伊之吉殿

昭和八年米生産統計調査ニ関シ克ク尽力セラレタリ茲ニ感謝ノ意ヲ表ス

昭和九年二月一日

広島県知事從四位勲三等湯沢三千男 印

(写真は省く)

この年家庭では、長男が東京で勉強したいと、次男に家を任せ叔父を頼って東京に旅立ち後結婚。翌10年1月6日結婚。

甘藍栽培は2年後の11年には生産額が

広村内蔬菜栽培中2位となり、賀茂郡農会長より表彰されます。

【史料35】 表彰状

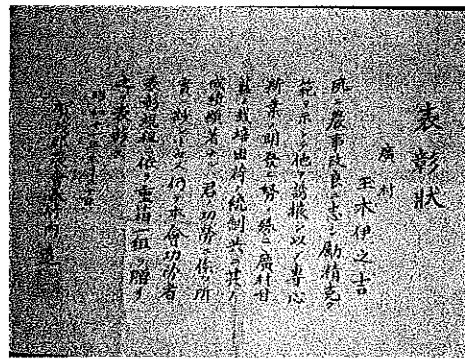
広村

玉木伊之吉

夙ニ農事改良ニ志シ励精克ク範ヲ示シテ他ヲ誘掖シ以テ専心斯ノ業ノ開発ニ努メ殊ニ広村甘藍ノ栽培出荷ノ統制共ニ其ノ成績顕著ナルハ君ノ功勞ニ俟ツ所実ニ歎シトセズ仍テ本会功勞者表彰規定ニ依リ重箱一組ヲ贈リ之ヲ表彰ス

昭和十一年三月三十日

賀茂郡農会長竹内 遠 印



また、翌年には甘藍の改良発達ならびに販売統制事業に顕著な功績をあげたとして、東京の市場関係会社から表彰状をもらいました。

【史料36】 表彰状

広園芸出荷組合長

玉木伊之吉

右ハ多年広甘藍ノ改良発達並販売統制事業ニ尽瘁シ其功績寔ニ顕著ナリ仍テ今回東京市場出荷満五周年ヲ迎ヘルニ当リ茲ニ記念品ヲ贈呈シ其功勞ヲ表彰ス

昭和十二年十月一日 印

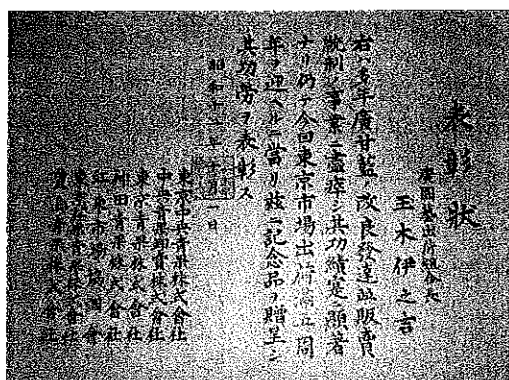
東京中央青果株式会社

中央青果卸売株式会社

東京青果株式会社

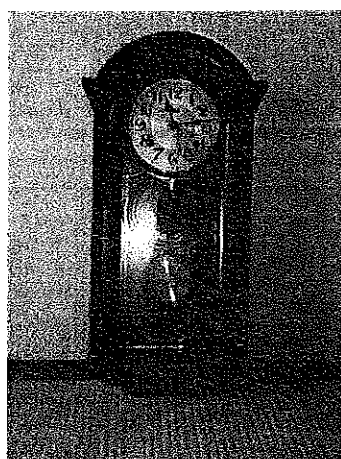
神田青果株式会社

江東市場協調会
東京荏原青果株式会社
豊島青果株式会社



それと同時に、広園芸組合にも同様な内容の感謝状と柱時計1個を受けたのでした。

(下写真はその柱時計)



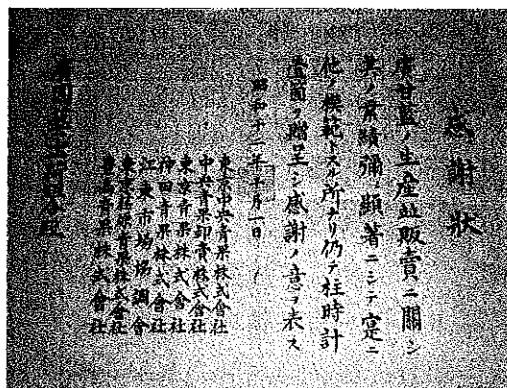
【史料37】 感謝状

広甘藍ノ生産並販売ニ関シ其ノ業績彌ニ顯著ニシテ寔ニ他ノ模範トスル所ナリ仍テ柱時計壹箇ヲ贈呈シ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十二年十月一日 印

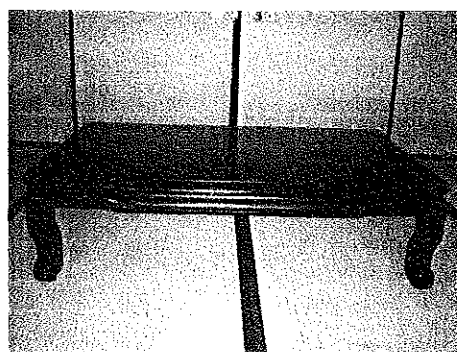
東京中央青果株式会社
中央青果卸売株式会社
東京青果株式会社
神田青果株式会社
江東市場協調会
東京荏原青果株式会社
豊島青果株式会社

広園芸出荷組合殿



このため広甘藍の名声はさらに高くなり、ついに翌13年に甘藍は広村における主要野菜生産額の1位になり75,070円の産額となりました。このため、広村長から伊之吉氏のこれまでの功績に対して感謝の念を込めて表彰状が贈られました。

この表彰状の最後の方には「甘藍・葱の如きは竟に全国的の声価を有するに至らしむ其の一村産業の発展に寄与せられたる功績洵に多大なるを認む、仍て応接机壹個を贈り茲に之を表彰す」というもので、広甘藍と葱を全国に広めた功績に報いたのでした。一村一品産業の先駆けともいえるものでした。



(上写真の応接机はそのときに贈られたもの)

【史料38】 表彰状

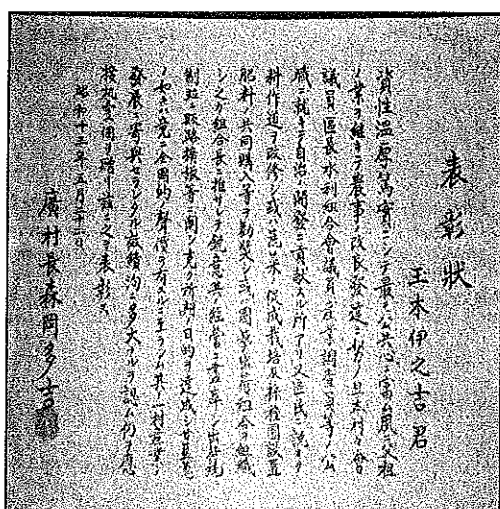
玉木伊之吉君

資性温厚篤実ニシテ最モ公共心ニ富ム夙ニ父祖ノ業ヲ継キテ農事ノ改良発達ニ努メ且本村々会議員、区長、水利組合会議員、産業調査員等ノ公職ニ就キテ自治ノ

開発ニ貢献スル所アリ又区民ニ説キテ耕作道ヲ改修シ或ハ蔬菜ノ促成栽培及採種圃設置肥料ノ共同購入等ヲ勸奨シ或ハ園芸出荷組合ヲ組織シ之ガ組合長ニ推サレテ鋭意其ノ経営ニ尽瘁シ出荷統制竝ニ販路拡張等ニ関シ克ク所期ノ目的ヲ達成シ甘藍葱ノ如キハ竟ニ全国的ノ声価ヲ有スルニ至ラシム其ノ一村産業ノ発展ニ寄与セラレタル效績洵ニ多大ナルヲ認ム仍テ応接机壹個ヲ贈リ茲ニ之ヲ表彰ス

昭和十三年五月二十二日

広村長 森岡多吉 印



陸軍大臣板垣征四郎より感謝状受賞

これらの功績は陸軍大臣板垣征四郎も認めるところとなり、国に貢献するところ大なりとして以下の感謝状を受けています。

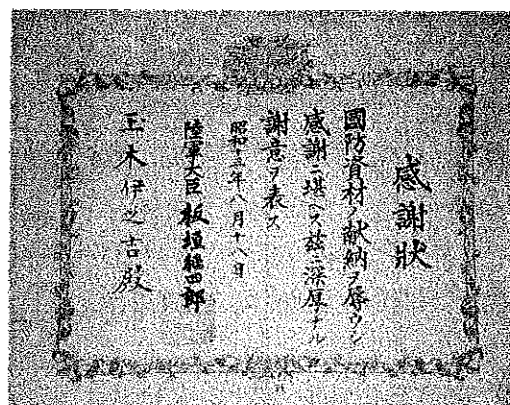
【史料39】 感謝状

国防資材ノ献納ヲ辱ウシ感謝ニ堪ヘス茲ニ深厚ナル謝意ヲ表ス

昭和十三年八月十八日

陸軍大臣 板垣征四郎 印

玉木伊之吉殿



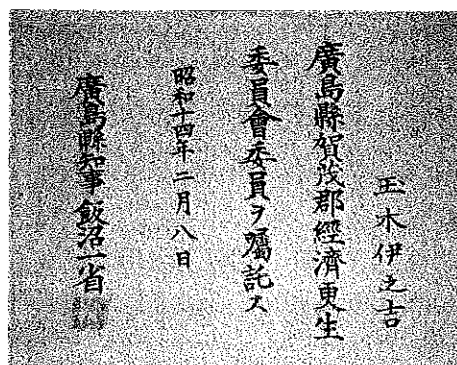
しかし伊之吉氏にとっては良いことばかりでもなく、この年4月跡取り息子が亡くなったので孫に後事をまかせることにします。そんな中にあっても14年、伊之吉氏は経済厚生委員を嘱託されています。

【史料40】 玉木伊之吉

広島県賀茂郡経済厚生委員会委員ヲ嘱託ス

昭和十四年二月八日

広島県知事 飯沼一省 印



73才の時でした。

それから6年後の昭和19年には「農事改良発達に尽力し、地域に貢献する事少なからず、特に甘藍栽培の研究に成功し、広甘藍の名声を高めた」ことに対して呉市長から表彰を受けています。

【史料41】 表彰状

玉木伊之吉殿

資性温厚篤実夙ニ農事ノ改良発達ニ意ヲ用ヒ郷党ニ貢献スル処尠カラズ就中甘藍栽培ノ研究ニ当リテハ刻苦多年不慮ノ失

敗ニモ屈セズ遂ニ克ク之ニ成功シテ広甘
藍ノ名声ヲ挙グ老来愈々矍鑠（かくしゃ
く）トシテ増産ニ指導ニ精励嘗（かつ）テ
倦ムコトヲ知ラズ其ノ功績洵ニ顕著ナリ仍
テ茲ニ記念品ヲ贈呈シ之ヲ表彰ス

昭和十九年四月二十一日

呉市長正四位勲三等 鈴木 登印

農商大臣から賞状を受ける

そして19年6月には農商大臣から、甘
藍・ネギをはじめとする蔬菜増産・供出に
関して、よく国家の要請に応えたとして賞
状を受けたのでした。

【史料42】 賞 状

玉木伊之吉

右者昭和十八年度蔬菜の増産及供出ニ関
シ克ク国家ノ要請ニ応へ其ノ功績顕著ナ
リ仍テ茲ニ農商功績者表彰規定ニ依リ之
ヲ表彰ス

昭和十九年六月三十日

農商大臣正三位勲一等内田信也印

このとき伊之吉氏は78才になっていま
した。

それから10年後の昭和29年に再び呉
市長から広甘藍栽培の功績により表彰され
ます。

【史料43】 表 彰 状

玉木伊之吉殿

呉市は貴殿が幼少より農業に励むこと幾
十年「広甘藍」の栽培に心血を注ぎ現在
の優良品種の結実に成功し全国にその名
声をひろめられる等農事の改良に貢献さ
れ郷土産業に多大の功績をいたされたこ
とを認め呉市表彰條例によって表彰しま
す

昭和二十九年十月一日

呉市長 松本賢一印



この時伊之吉氏は88才でした。

おわりに

以上さまざまな資料をみてきましたが広
甘藍の栽培は、明治37～38年の日露戦
争時に呉市場に出回っている甘藍（たまな）
をみて栽培意欲を触発され、在、外来種や
大阪などから種を取りよせたものの栽培に
成功することができず、結局玉木伊之吉氏
たちの品種改良努力によって、明治末年に
広の地質にあったこれまでにない新種栽培
に成功し、その後も品種改良にとりくみ、
やがて「広カンラン」の愛称で呼ばれる新
品種栽培に成功したということになります。

それは明治末期から大正時代にかけて第
一期隆盛期をむかえ、昭和に入って飛躍的
に生産高をあげ、ついに昭和18年に広村
で蔬菜生産物中トップになり、全国有数の
生産地になったのでした。

玉木伊之吉氏が「広甘藍生みの親」とよ
ばれるようになったのはその功績によるも
ので、数多くの表彰状がそれを証明してい
ます。

戦時中、地元の人を中心に、地域振興に
果たした功績に感謝して伊之吉氏の銅像を
作ろうという機運があったのですが、当時

戦争遂行のため金物供出運動がひろがり、このような時運に銅像造りはできまいということで立ち消えになるということもありました。



(家族との記念写真・前列左は長男高市、その右伊之吉、その右チノさん)

しかし今でも広甘藍といえば玉木伊之吉、玉木伊之吉といえば広甘藍といわれるように「広甘藍生みの親」としてよく知られています。それはこれまで紹介した多数の資料や表彰状が証明しており、郷土が誇る人物のひとりです。

広島県はこの広甘藍の栽培を広地区だけでなく県内、特に南部地区向けの栽培指針・栽培事例として紹介し、各地で広甘藍を栽培するよう指導に力をいれ、広島県の産品としようとしていました。

現在各地でこの広甘藍をよみがえらせるべく栽培にとりこんでいますが、甘くておいしいキャベツがふたたび家庭に普及するよう願っています。

なお、本論を書くにあたって多数の農業資料の提供をしていただいた広島市安芸区矢野の山本雅典氏に対して深く感謝の意を表します。



(晩年の伊之吉・チノ夫妻)



(玉木伊之吉翁ここに眠る。吉松にある玉木家墓地。昭和32年3月20日亡92才)

参考文献

- 1 『明治6年6月発行 西洋蔬菜栽培法開拓使蔵版』国会図書館所蔵
- 2 明治20年から昭和15年までの広村『統計諸報告控』。広市民センター所蔵。
- 3 『広村郷土読本』広島県賀茂郡広西尋常高等小学校発行。昭和12年9月23日。
- 4 『営農』郷土の誇る特産蔬菜を訪ねて(9)「広甘藍」昭和23年記。広島県農協中央会刊昭和56年11月号より。
- 5 『広島農業』第3巻・第7号 広甘藍の作り方 久保田秀夫 振農会(広島県立農事試験場内)昭和25年7月1日発行
- 6 「呉市広甘藍について」(昭和30年資料より)
- 7 「蔬菜園芸各論」熊沢三郎著。昭和34年第4

- 版。養賢堂刊より
- 8 「呉市特産広甘藍について」昭和38年。
- 9 昭和49年度「広甘藍原々種採種事業」『呉市園芸試験場報告書』呉市経済部水産課刊より。
- 10 「広甘藍の採種基準」昭和52年12月。県農試・沖森部長記。
- 12 食文化雑考(52)広島特産の由来 その4 広甘藍 日本民俗学会評議員・神田三亀男。『農協ひろしま』No.472・広島県農業協同組合中央会1990年4月。
- 13 『読売新聞』昭和57年6月27日付記事。
- 14 『広島県農業発達史・資料編』「芸備の園芸」大正元年広島県農会発行より。「各都市に於ける蔬菜生産額」655頁。
- 15 『安佐郡誌』昭和2年12月25日発行。広島県安佐郡自治協の復刻版。昭和50年2月10日発行、63頁、蔬菜。
- 16 『大呉市民史大正編下巻』中国日報社。昭和31年9月20日発行、610頁。
- 17 『世界大百科事典』7。平凡社、下中直人。2007年9月1日改訂新版発行 161頁
- 18 『原色牧野植物大図鑑』離弁花・単子葉植物編 275頁。牧野富太郎。北隆館。平成9年3月20日発行。
- 19 『広島県教育会編纂改訂広島県農業教科書上巻』東京合資会社六盟館発行。
- 20 『広村』武内充忠著。大正4年12月21日東京警眼社発行
- 21 『地誌広町』田村信三著。
- 22 『甘藍の品種と栽培』広島県蔬菜栽培シリーズ第2巻。広農試可部芸支場内・広島園芸会。昭和33年発行。
- 23 『ひろしま歴史の焦点下・明治維新から100年』中国新聞社。「共同苗代騒動」
- 24 『矢野町広報』昭和29年3月発行。
- 25 『芸備農報』大正7年6月発行。
- 26 『芸備農報』明治44年発行。「甘藍(たまな)は如何にして作るか」渡辺五節。となっているので、当初から「たまな」で通用していたようです。
- 27 『海外移住者名簿 1963』広島県・広島県海外協会 昭和38年2月発行。
- 28 『野菜園芸大百科第2版』キャベツ・ハナヤサイ・ブロッコリー農文協編農山村文化協会発行。
- 29 『呉市史第6巻』呉市史編纂委員会、呉市役所、和63年3月発行。
- 30 『広島県史近代I』広島県、昭和55年3月発行
- 31 『広島県史近現代資料編I』広島県、昭和48年3月発行
- 32 『観光呉地誌』楠 務 昭和26年9月10日発行 芸備観光地誌社

註 伊之吉氏が受けた表彰状等の時代別一覧

史料番号	受賞年月日	種類	贈呈者	備考
1	明治38年12月14日	表彰状	帝国義勇艦隊建設義金抛出	帝国海事協会理事長
2	40年4月1日		広村村長から	37、8年戦役への後援、役後の歓迎などの功勞により受彰
3	41年5月9日	褒状	賀茂郡広村農会長	第6回広村農会苗代品評会一等賞
4	42年9月10日	表彰	賀茂郡長	農事改良共同苗代設置の功
5	44年12月28日	謝状	広島市安芸郡安佐郡連合農産物品評会会長	甘藍と葱を参考として出品。今後に役立つとして
6	45年3月28日	囑託状	大日本武徳会広島支部長から	広島支部拡張委員を囑託
7	大正元年12月20日	証 一等賞	広島県農会長	第3回賀茂郡園芸品評会 甘藍を出品
8	々 々 々	々	々	葱を出品

- 9 同2年12月14日 証 一等賞 々 第4回 々 甘藍を出品
- 10 3年12月13日 々 々 々 第5回賀茂郡園芸品評会 葱を出品
- 11 4年12月12日 々 々 々 第6回 々 葱を出品
- 12 5年12月14日 々 々 々 第7回 々 甘藍を出品
- 13 々 々 々 々 々 々 葱を出品
- 14 6年12月12日 々 々 々 第8回 々 葱を出品
- 15 7年12月15日 々 々 々 第9回 々 甘藍を出品
- 16 々 々 々 々 々 々 葱を出品
- 17 8年5月25日 表彰状 広村村長 多年公職（村会議員・区長）従事につき
- 18 9年12月12日 証 一等賞 広島県農会長 第11回賀茂郡園芸品評会 葱を出品
- 19 9年9月7月20日 国勢調査員任命書 内閣
- 20 11年4月5日 通知書 大正11年3月皇后陛下行啓の際御用仰せ付けられる。甘藍御用
- 21 11年12月10日 証 一等賞 広島県農会長 第13回賀茂郡園芸品評会。甘藍を出品
- 22 11年12月10日 証 一等賞 広島県農会長 第13回賀茂郡園芸品評会 葱を出品
- 23 12年3月31日 表彰状 賀茂郡農会長 農事改良に範を示したことに對して
- 24 13年3月31日 奨励金交付証 々 農事精励反当たり玄米収量増加の功績
- 25 14年5月23日 長年村会議員としての功勞に對しての謝状 広村村長
- 26 14年12月6日 名誉賞状 大日本農会総裁 農村施設經營・農事改良の功績
- 27 昭和3年2月7日 會員証 帝国飛行協會 本会紅色會員証
- 28 昭和3年11月24日 賞状 一等賞 広島県立西条農学校品評会長 葱を出品
- 29 昭和3年12月20日 賞状 一等賞 広島県農会長 葱を出品
- 30 昭和4年7月1日 農業調査員任命証 内閣
- 31 昭和5年12月1日 通知状 広島県 10月に海軍兵学校行幸の際御用仰付 甘藍献上
- 32 昭和5年12月1日 謝状 広島県知事 天皇陛下行幸の際甘藍献上に對して
- 33 昭和8年2月11日 感謝状 中央園芸組合 大正3年園芸組合を組織し推されて組合長になつて以來の功績に對して
- 34 昭和9年2月1日 感謝状 広島県知事 昭和8年米生産統計調査の功勞に對して
- 35 昭和11年3月30日 表彰状 賀茂郡農会長 広村甘藍の栽培出荷統制に對しての功績
- 36 昭和12年10月1日 表彰状 東京の青果株式会社等7社 広甘藍の改良發達販売の功績に對して伊之吉さんへ
- 37 昭和12年10月1日 感謝状 東京の青果株式会社等7社 広園芸出荷組合へ
- 38 昭和13年5月22日 表彰状 広村村長 本村産業發展に寄与した功績に對して
- 39 昭和13年8月18日 感謝状 陸軍大臣 国防資材の献納に對して
- 40 昭和14年2月8日 囑託状 広島県知事 賀茂郡經濟更正委員會委員
- 41 昭和19年4月21日 表彰状 呉市長 農事改良、特に甘藍栽培の名聲を高めたことに對して
- 42 昭和19年6月30日 賞状 農商大臣 昭和18年度蔬菜増産の貢獻に對して
- 43 昭和29年10月1日 表彰状 呉市長 広甘藍を全國に優良品種として広めた功績に對して

2014 年度芸備地方史研究会大会のご案内

広島郷土史研究会のご協力のもと、来たる7月27日(日)、呉市広市民センターにて「近代広島の音楽史構築をめざして」をテーマに、研究報告会・シンポジウムを開催します。

午前中の研究報告会では、三名の方に日頃の研究成果を発表していただきます。

松井今日子氏は、安芸・石見地方における「囃し田」を取り上げ、その歴史について発表する予定です。

梶山俊二氏「藤井清水とふるさと広島」は、安芸郡焼山村(現呉市)出身の作曲家・藤井清水の、広島における作曲活動や交流関係を中心とした発表です。

坊田謙治氏「童謡作曲家 坊田かずまの生涯」では、安芸郡本庄村(現熊野町)出身の坊田かずまの生い立ちや音楽活動を紹介します。坊田かずまは、呉海兵団軍楽長の河合太郎と交流があり、藤井清水に作曲の指導を受けるなど、呉にゆかりのある人物といえます。



《写真は藤井清水》



《写真は坊田かずま》

午後からは「戦前の広島における洋楽の普及」というテーマでシンポジウムを開催します。

このシンポジウムでは、研究状況の報告・来場者との討論を通じて、広島における洋楽流入と普及の過程を明らかにすることを目指します。

まず、戦前(明治～満州事変勃発前まで)の時代を対象に、広島の洋楽普及に大きな役割を果たしたとされる四つの機関(呉海兵団軍楽隊／キリスト教系ミッション・スクールおよびその母体教会／広島高等師範学校を中心とする官立学校／広島中央放送局)を取り上げた個別の研究発表を行います。そして、エリザベト音楽大学教授・片桐功先生によるコメントの後、来場の皆さまのご質問・ご意見に答えるかたちで議論を進めていきます。

今年度の大会は、呉にゆかりのある人物や機関をテーマにした研究発表が目白押しです。皆さまお誘い合わせの上、奮ってご参加ください。

(文責 笠井今日子)

★ 2014 年度芸備地方史研究会大会 開催要項 ★

- (1) テーマ 「近代広島音楽史構築をめざして」
- (2) 開催日 2014 年 7 月 27 日 (日) 9:30 開場 10:00 開会
- (3) 会場 呉市広市民センター 5 階大会議室 (呉市広古新開 2 丁目 1-3)
- (4) 共催 広郷土史研究会
- (5) 大会日程 (予定)
- 10:00～10:10 開会挨拶
- 10:10～12:10 研究報告
- 10:10～10:50 松井今日子 (タイトル未定)
- 10:50～11:30 梶山 俊二「藤井清水とふるさと広島」
- 11:30～12:10 坊田 謙治「童謡作曲家 坊田かずまの生涯」
- 12:10～12:40 芸備地方史研究会総会
- 12:40～13:30 休憩
- 13:30～17:30 シンポジウム「戦前の広島における洋楽の普及」
- 13:30～15:30 個別報告
- 竹下可奈子「『呉新聞』にみる呉海兵団軍楽隊
—大正 13 年から昭和 6 年までに焦点を当てて—」
- 光平 有希「広島女学校音楽部の活動に関する一考察
—『米国南メソジスト監督教会年報及び議事録』を中心に—」
- 大迫知佳子「大正から昭和初期の広島における丁未音楽会の活動
—新聞・写真・私家版『廣島の音楽五十年 未定稿』の考証を中心に—」
- 能登原由美「広島の洋楽普及における放送メディアの役割
—広島中央放送局開局時の自局制作番組にみる—」
- 15:30～15:45 休憩
- 15:45～16:05 コメント (エリザベト音楽大学教授 片桐功氏)
- 16:05～17:00 質疑応答
- 17:00 閉会

※参加費無料、事前の申し込みは不要です。

※大会の詳細は、当会HP (<http://home.hiroshima-u.ac.jp/geishi/>) などで公開します。



***** お問い合わせ *****

芸備地方史研究会 (大会担当 笠井)

〒739-8522 東広島市鏡山 1-2-3

広島大学大学院文学研究科内

Tel ; (082) 424-6643 (FAX 兼用)

Mail ; geishi@hiroshima-u.ac.jp

藤田家文書 F J 章

その3

今回は前回同様、藤田譲夫村長に対して従来の村政のあり方を例示して、参考に供する目的で記された村方文書のつづきです。

解説 広郷土史研究会古文書部会

境目等を糺しほのき斗代等を以本帖え引合紛敷事無之様ニ可仕候、別而分明畝ニ而売買仕候節ハ双方へ高甲乙無之様ニ盛附、売主方口ニテ高残し不申候様ニ吟味念入可申候、且又年数を切買之如シ之約束ニ而売買仕候儀有之候由

左様之品ハ證文ニ其何や委細書記し双方證文取替し右写し庄屋元ニも取置候様ニ可仕也

一、請帳切之事

右帖切之儀は其子細委細吟味いたし證文等も證人を立加印を取後々ニ至候而も双方申分無之様ニ念入可申候、帖切も早速庄屋元ニ而事済せ尤證文之写シ庄屋方へも取置候様ニ可致候、此儀ニ付双方責無之様ニ役人共心を付可取計事

一、御貸物人別請印形帖之事

右御貸米銀共早速人別ニ致割賦請印形

F J - 0 7 1 - 1 0 ~ 1 1

取候而早速御代官所へ可差出候是又村廻り出郡序ニ口面相違無之哉之段相しらべ印形取置候様可相成事

一、塩浜酒場売買并ニ家屋敷田畠山林質入之事

右双方之證文念入取替せ後々ニいたり申分無之様ニ可仕候、酒場之儀は年数切譲受候ハ其證文委細を書記し已後紛敷儀無之様ニ念入可申事

一、御代官所へ不出と村々庄屋許ニ有之根帳諸算用合之事

右帖面之儀組合割庄屋見届候而一ヶ年限ニ惣百姓えも割庄屋より見せ候而百姓不審之儀も無之哉其段相記シ口百姓共之印形取置候様ニ可致候

郡村々より右之根帖若無之方角も候ハ此度より改メ拵置、以来右之仕形ニ可仕候事

附り毎年百姓共へ遣し候下ヶ札無遅滞様ニ人別相渡シ可置候村々より年を重ふ

F J - 0 7 1 - 1 2

相渡方角も有之様ニ相聞へ候以来念入候様ニ可致事

右之趣此度念入申付候様ニ被仰出候依之大筋申付候之間此餘口之候儀も有之候ハ其趣ニ従ひ右之筋ヲ以念入兎角役人共手前明白ニいたし末々より疑ひ不申様ニ弁白可相心得候、ヶ様之儀は年を経候得は物毎流安ク、不しまりニ相成候全村方之為メニ候条後々ニ至迄も譲合之儀無之様ニ年々を以念入可申者也

西川文右衛門 印

酉五月

藤川次右衛門

F J - 0 7 1 - 1 3

例会の主な感想

海軍に就いてのお話し、次回にも是非うかがいたいものです。

広島湾の防備線が幕末から由来するとは知りませんでした。もっとこういう話を聞きたいと思います。

石井 和美

鎮守府が呉か江田島どちらかと疑問府を示して下さい驚きました。興味深くお聞かせ下さりありがとうございました。

山根 喜代晴

平清盛と平家伝説について全てが平家落人伝説を有する人々だけの口碑と考えておりましたが、能美島南部の「当浦真言宗南城山薬師坊代々副書略記」に江戸時代の文書であるが残されていたことを初めて知りました。

この文書は当時の人でないと分かり得ない詳細な記述で到底作り話しとは思えない内容でした。

源平争乱期に残された「能美家文書（山野井家文書）・萩藩閥閥録所収文書」にも当時の能美荘庄官が残した文書が多く残されており、内容の分析から源氏方に一味したとは思えない記述でしたが、日本歴史上の通史では、平家方でなく源氏方で有ったため鎌倉・室町期を生き抜いたように論じられて来ましたが、源平の争乱期には厳島神主佐伯氏共々平家一味であったと判断されるべきものと思いました。

地域の歴史家だけが知っている郷土の史料がこれからの日本史を書き替えるような

発見があるものとしみじみ感じました。

今回はありがとうございました。

上河内 良平

平成 26 年度 総会案内

この例会終了後に本年度の総会を行いますので多数ご参加下さい。

総会資料は別刷冊子を用意しております、この会報と一所に送付致します。

議事は下記次第を参考にして下さい。

記

総会次第

議事

進行役

会長

①. 平成 25 年度事業報告（承認）の件

1. 会報発刊 6 冊／年間

2. 県史協機関誌第 31 号発刊

3. 郷土広町歴史読本発刊

事務局長

②. 同収支決算報告（承認）の件 会計

③. 同監査報告（承認）の件 監査

④. 平成 26 年度事業計画案（承認）の件

事務局長

⑤. 会員数増強提案・希望例会提案の件

⑥. その他

以上

会費納入のお願い

この会報は皆様の会費で発行されています。同封の振替用紙で今年度分会費を納入下さい。例年どおり例会受付でもお支払いできますので宜しくお願い致します。

当社は郷土の文化活動を応援します

株式会社 ホンダアーバン

代表取締役 土路生 修

〒737-0104 呉市広町田1-2-18

TEL 0823-73-1055 FAX0823-74-5890

高齢者講習受けられます

広島県公安委員会指定

呉 自 動 車 学 校

〒737-0142 呉市広駅前 2-2-33

TEL 0823-73-3000 (代表)

例会報告

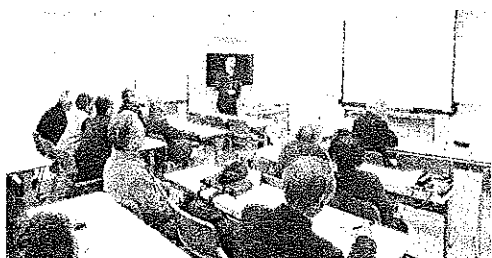
さる平成26年3月23日(日)江田島市文化財保護委員長、宇根川進先生に「平家伝説と江田島」と題して講演を頂きました。

先生は別府大学文学部史学科を卒業された後、郷土江田島町史編纂員として地域の歴史を研究されています。

専門は近代史で旧日本海軍史の研究ですが2年前の「県史協機関誌第30号」編纂時のテーマ「平清盛と平家伝説」の特集記事執筆依頼からのお願いで「能美島・江田島の平家伝説」の原稿を提出下さいました。

平家の隠された資料が今回会報に掲載できたことは将来の研究者に大変参考になると思いました。

なお、当日出席者名簿を提出された方は、小栗康治・上河内良平・亀樋三津夫・山根喜代晴・石井和美・山本光昭・中向井純子・大野翠・山木勝利・畑中省三・行友勲・福本健・三浦百合子・吉井幸子・広田勲・木村興一・菅原幸人・鈴木恵子・丸山幸一・吉田顕治ほか10名の30名でした。



当日講演される宇根川 進 先生



当日会場の聴講者

第112回

例会のお知らせ

期日：平成26年5月25日(日)

開演：午後2時～午後4時まで

場所：広まちづくりセンター

第501号室 小会議室

演題：郷土が誇る人物評伝 玉木伊之吉

広甘藍生みの親

講師：広郷土史研究会 会長

小栗 康治

小栗康治先生は広郷土史研究会再組織時からの主要メンバーで3年前、矢口一美会長死去に伴い会長に就任されました。

地道に郷土の歴史を研究され前矢口会長の甘藍物語などの歴史経過を共に発掘されて来ましたが今回、玉木家に伝わる広甘藍保存資料によって明治後期以後の歴史を発表されます。ご期待下さい。

次回例会のご案内

7月の例会は「芸備地方史研究会」の2014年度大会と共同開催致します。

テーマ：近代広島音楽史構築をめざして
内容の詳細は28頁を参照下さい。

大学の研究者などの詳しい先生方の研究発表を身近で見学できる催しです。

会員以外も特別に参加できますので友人を誘ってご来場下さい。

古文書部会のご案内

期日：平成26年6月22日(日)

時間：午後2時～午後4時頃まで

場所：広まちづくりセンター

第501号室 小会議室

「藤田家文書」の解読作業を行います。